



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第66号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2015-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73633
Type	journal
File Information	DRFmonthly_66.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第66号

No. 66 July, 2015

【特集1】平成27年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム
【報告】DRF エルゼビア社の共有ポリシーへの反対声明に署名
【特集2】国際会議参加報告: OR2015
【特集3】JAIRO Cloud移行事例紹介: 上越教育大学
【連載】いまそこにあるオープンアクセス 第13回
「エルゼビア社の新方針をめぐる議論」

【特集1】平成27年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム

平成27年6月11日（木）～12日（金）、国立情報学研究所の「学術情報基盤オープンフォーラム2015」が学術総合センターで開催されました。本誌ではオープンサイエンス及び機関リポジトリに関するセッションの様態をレポートします。なお、セッションの資料は[国立情報学研究所のwebサイト](#)にて公開されています。

1. オープンサイエンスに向けた図書館の取り組み

図書館にとってのCSTI報告書レビュー

杉田茂樹 氏（千葉大学附属図書館）

[CSTI報告書](#)が図書館にとっていかなる意味を持つのかについて報告がなされました。CSTI報告書では、オープンサイエンスの実現に向けて、大学図書館が重要な役割を担うことが求められています。そのための人材育成システムの構築は、大学図書館にとって大きな課題です。本報告では、人材育成システムの構築をただ待つのではなく、大学図書館職員一人ひとりが積極的に行動していく必要があることが、熱意をもって語られました。

データライブラリアンに求められる能力と人材育成

池内有為 氏（筑波大学大学院）

オープンサイエンスにおけるデータライブラリアンの役割、またデータライブラリアンに求められる能力、さらにその人材育成に関して報告が行われました。データライブラリアンの役割、能力については、研究者へのガイダンス・研究データの管理という二つの観点から検討がなされていました。また、人材育成に関しては、海外における事例が多数挙げられました。そうした事例には興味深いものも多く、特にライブラリアンが研究現場に実際に参与するという事例には驚きを感じました。

海外事例に見る

オープンサイエンス推進における図書館の役割

西園由依 氏（鹿児島大学附属図書館）

研究データ管理をテーマとした国際会議への参加報告を基にした本報告では、海外における研究データ管理の実情について、多くの調査結果や事例を挙げて報告が行われました。研究データ管理対応の主導的な役割を図書館が担っているという

認識が、英国の研究志向大学においては存在するという調査結果などが紹介されました。報告内容は多岐にわたっており、報告時間内だけで全ての内容を理解することは困難な部分もありましたが、研究データ管理についての見識を深めることが出来たと感じています。

研究データにDOIを – JaLC実験プロジェクト

中島隼子 氏（科学技術振興機構 知識基盤情報部）

参加9機関の様々なデータを用いてDOIの登録テストを行っていること、運用方法の検討のため、熱心な議論が続けられていること、今後はDOIの登録単位やドメインのメタデータ作成のタイミングなどについての検討が行われていくことなど、JaLCの活発な活動の様子が紹介されました。平成27年10月に完成予定の「研究データに対するDOI登録ガイドライン」には、ワークフローなどの実作業に役立つ内容が盛り込まれるとのことであり、実務担当者の待望の1冊になりそうです。

研究データ管理：図書館に期待される機能、役割

大園隼彦 氏（岡山大学附属図書館）

海外助成機関のデータ管理ポリシーと管理計画書から、図書館に求められる機能・役割を考えることをテーマに報告されました。「わが国におけるデータシェアリングのあり方に関する提言（JST 科学技術情報委員会）」と英国の事例を紹介され、データライフサイクルという考え方と詳細なデータ管理ポリシーの必要性を示されました。また、保存とアクセス保証のノウハウを蓄積すること、データ管理に関する様々な要因を理解すること、データ管理ポリシーを立てることがもたらす機関のメリットを考えることなどを挙げ、今後図書館が考えていくべきことを示唆されました。

（次頁へ続く）

会場からは、「現場ではコンテンツをください、データもくださいで良いのか」といった問いかけや「論文の中に埋め込まれた図面と一緒に数値データがあるだけでも大きな進歩」「図書館の方には分野により異なるメタデータスキーマに注意をはらってほしい」「研究データを出してもいいと思ってもらえるような、きちんとした管理規則やルールをつくることが重要」といった発言があり、活発な意見交換が行われました。「データには、つくって、つかって、公開してアーカイブするというライフサイクルがあり、公開されるデータもあれば公開されないデータもある。データライフサイクルを見越したプランを持った上で、支えていく管理体制を整えなくてはいけない」というのが今日のストーリー、とまとめられました。



会場の様子

2. 機関リポジトリ推進委員会企画セッション

■コンテンツWG報告&情報交換

博士論文インターネット公表の実態調査報告

松原恵 氏（東京大学駒場図書館）

機関リポジトリ推進委員会コンテンツWGが今年の3月にまとめた「博士論文のインターネット公表に関する現況と課題(報告)」をもとに、調査結果が報告されました。平成25年度に学位が授与された博論の機関リポジトリにおける公表率は、全文及び、要旨・要約・二次情報のみが公開されたものを合わせると平成26年11月時点で50%を超えており、公表が進んでいることが示唆された反面、機関リポジトリ未構築の機関についての網羅的な調査ができていない点や公表の際の課題への対処法が各機関でまだ模索中である点など、調査の結果判明した問題点についても報告されました。

リポジトリはILLを救うか？

～IRcuresILLプロジェクト報告

鈴木雅子 氏（静岡大学附属図書館）

ILL依頼の多い論文を機関リポジトリに搭載していこうという『IRcuresILL』の活動について報告されました。本プロジェクトは平成20～21年にNIIのCSI事業だった同プロジェクトを引き継いだもので、平成21～25年のNACSIS-ILLでの依頼件数上位文献を調査したところ、1位論文の依頼数は依然として高く、また、トップ5の論文の顔ぶれは平成18年から8年間ほとんど変わっていないとの調査結果が紹介されました。また、平成25年の上位100論文について公開可能かどうかの調査を行ったこと、それら論文のオープンアクセス化を目指していることが報告されました。

■技術WG報告&情報交換

技術ワーキングの活動概要

佐藤翔 氏（同志社大学）

平成26年度の主な成果として「JaLCガイドライン策定への協力」「標準ロボットリストの構築」「機関リポジトリ-researchmapの連携」に取り組んだこと、平成27年度の活動予定として「機関リポジトリログの標準処理・解析結果表示システムの構築」および平成26年度に引き続き「機関リポジトリ-researchmap連携」に取り組んでいることが報告されました。この2つについては、続く2つの講演で詳細が報告されました。

機関リポジトリログの標準処理・解析結果システムの構築

五十嵐健一 氏（慶應義塾大学メディアセンター本部）

標準ロボットリストの構築について報告されました。基となる千葉大学ROATプロジェクトの概要紹介の後、公開されたばかりのJAIRO Crawler-Listの内容と運用について説明されました。また、今後の計画として、JAIRO Cloudデータでの検証と実装、評価版システムの構築も紹介されました。機関リポジトリが同じロボットリストを用い、ロボットのアクセスを除外したログを把握するようになれば、より正確な比較やアクセス分析ができるようになると述べ、JAIRO Crawler-Listの利用を促されました。

機関リポジトリとresearchmapの連携

林豊 氏（九州大学附属図書館）

機関リポジトリとresearchmapの連携について、2つの取り組みが報告されました。まず、researchmapとIRDBのマッチングプロジェクトについて、完全一致の低さという課題に対応するために使用したバイグラムによるマッチング手法が紹介されました。次に、researchmapからJAIRO Cloudへのコンテンツインポート機能の開発が紹介されました。今後やるべきこととして、researchmap自体の利用促進と、確実なリンクのための識別子の普及などを挙げ、新しいコンテンツ登録ワークフローの可能性を示されました。

■激論これからのIRコミュニティ

パネリスト：内島秀樹氏（神戸大学附属図書館）、杉田茂樹氏（千葉大学附属図書館）、
加川みどり氏（神戸松蔭女子学院大学図書館）、尾城孝一氏（東京大学附属図書館）
モデレータ：高橋菜奈子氏（国立情報学研究所学術コンテンツ課）

機関リポジトリの活性化のためにコミュニティをどういった方向に進めていくと良いか、ということテーマにパネルディスカッションが行われました。はじめに、機関リポジトリ推進委員会委員の尾城氏が話され、新しいコミュニティを作り、そのコミュニティを中心にした、共考・共創型のコンテンツのインフラ整備を行っていく必要があると語られました。

次に、内島氏、杉田氏から、DRFについてCSI事業を土台に誕生し、メーリングリストや研修会を通して横のつながりがつくられてきた経緯や、博士論文の勉強会を行うなど、担当者の問題解決のサポートとなる活動を自発的に行っている現状が紹介されました。また問題点として、予算がないこと、メーリングリストに初歩的な質問がしにくくなっていることなどが挙げられました。

さらに、加川氏からJAIRO Cloudのコミュニティの紹介があり、運営の難しさとして、メンバーの異動に伴う継承が挙げられました。

その後、「機関リポジトリ推進委員会が、全体の目標のため、‘世のため人のため’にあるのに対し、DRFは、各大学の担当者が‘自分達のため’に参加し、コミュニティを育てることができるのが魅力。

メーリングリストもぜひ活用してほしい」「うまく連携しながら続けていけば、情報のシェアや課題の共有もできる」「まかせてしまうのではなく、一人一人が少しずつ力を出してほしい」「コミュニティが閉鎖的なものにならないよう、出入りが楽にできるようにしておくことが大切」といった意見が出され、「新しいものを目指していかなければならない」と議論は締めくくられました。



パネルディスカッションの様子

レポート：香川文恵（DRF企画WG・金沢大学）、塩田知也（DRF企画WG・千葉大学）、下村昌也（DRF企画WG・神戸大学）

【報告】DRFエルゼビア社の共有ポリシーへの反対声明に署名

平成27年4月30日にエルゼビア社が自社の雑誌掲載論文に関する共有及びホスティングに関する新しいポリシーを発表したことに対し、COARが反対を表明し、それに同意する機関や個人を募っています。

これを受けDRFでも6月2日に表明へ賛同するための署名をいたしました。DRFを含めて6月30日現在で244機関が反対声明に署名しています。

これに対し、エルゼビア社はこの声明に反論するコメントを出しています。

なお、この反対声明をめぐる議論は今号の栗山先生の連載「いまそこにあるオープンアクセス」でも取り上げています。

COARの反対声明や賛同機関は以下のURLから確認できます。（DRFはOrganisational Signatories: 115）
(<https://www.coar-repositories.org/activities/advocacy-leadership/petition-against-elseviers-sharing-policy/>)

エルゼビア社の反論コメント

(http://jipsti.jst.go.jp/johokanri/sti_updates/?id=8060)

参考

・エルゼビア社のポリシー

(<http://www.elsevier.com/connect/elsevier-updates-its-policies-perspectives-and-services-on-article-sharing>)

・反対声明の和訳(機関リポジトリ推進委員会作成) (<http://id.nii.ac.jp/1280/00000108/>)

【特集2】 国際会議参加報告: OR2015

OR2015: 10th International Conference on Open Repositoriesに参加して

寄稿: 新岡美咲 氏 (筑波大学)

Open Repositories (OR) は、世界各国から大学図書館や研究機関のリポジトリ担当者や技術者、出版関係者等が集まり情報の共有や議論を行う国際会議です。2006年から毎年開催されており、今回 ([Open Repositories 2015 : OR2015](#)) で10回目を迎えます。今年は6月8日から6月11日の期間に米国インディアナポリスで開催されました。米国を中心に450名程度の参加者がありましたが、日本からの参加は筆者を含め3名のみでした。本報告ではカンファレンスの様子や筆者が行ったポスター発表について報告します。

1. カンファレンスの模様

Mozilla Science LabのKaitlin Thaney氏の基調講演 "[Leveraging the Web for Research](#)" では、技術系の参加が多かったためか、方法を考えるよりも有用性でリポジトリを考え、非技術的な挑戦を忘れるなどという言葉に賞賛が集まりました。

リポジトリコンテンツを再利用し新しいサーチエンジン構築するなど、それぞれの大学図書館や研究機関で行われている個性的な取り組みや、ORCIDと連携したDSpace、Eprints、Hydra、DRYADの機能の紹介等のセッションに参加しました。事例発表ではDSpaceを使った機関リポジトリが多い印象でした。

最も印象に残ったのはGoogle ScholarのAnurag Acharya氏の講演 "[Indexing repositories: pitfalls and best practices](#)" で、Google Scholarで行ってい

るリポジトリのインデキシングについて知ることができました。具体的には、「発行年月日がいりすぎりしない文献があれば、間違った情報を登録するよりも何もない方が良い」「大きいファイルがあっても、細かく章毎等に分割せず、そのまま登録する」等です。「What we index is what you see」という言葉が印象に残りました。

2. ポスター発表

2日目(6月9日) 18:00-20:00の[ポスター・レセプション](#)においては、機関リポジトリ推進委員会のコンテンツWGと国際連携WGが共同で取り組んでいる「[IRcuresILL: Institutional Repository cures Interlibrary Loan / Document Delivery](#)」プロジェクトについて、ポスター発表を行いました。IRcuresILLとは、NACSIS-CAT/ILLのデータを元に、ILLで飛び交っている人気論文をIRに登録し、オープンアクセス化しようとする取り組みです。それによって、顕在的・潜在的な需要に応え、さらに、各機関においてのILL作業の負担を減らすことを目的としています。ポスターは概ね好評で、20人程度から質問やコメントをいただきました。好意的なコメントが多く、プロジェクトをこれからも継続していくよう激励を受けることもありました。

主な質問とそれに対する回答は以下の通りです。

ポスター発表への質問と回答

(質問) ILL依頼が多い人気論文の登録をどのように著者等に勧めるのか？

(回答) 登録を断られたら仕方ないものとあきらめる。今回も登録NGが4割ほどあった。

(質問) NACSISという1つのシステムで日本全体の状況を把握できるのか？

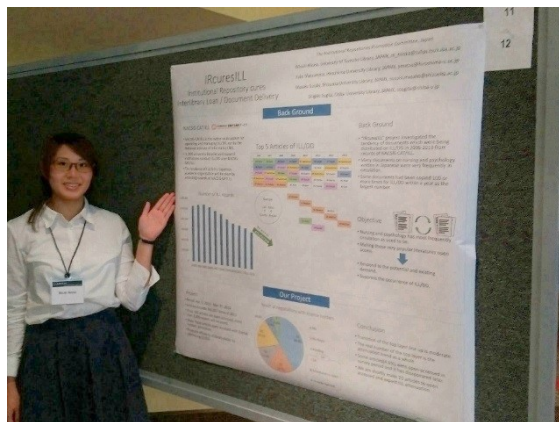
(回答) ほとんどの大学図書館や研究機関は加入しているので把握できると思う。

(質問) 日本全体で機関リポジトリはどれくらいあるのか？

(回答) 500くらい。

(質問) 日本で多いリポジトリは何か？DSpace？

(回答) 現在はJAIRO Cloudが多い。



発表ポスターと筆者

国立情報学研究所が平成24年度から運用を開始した共用リポジトリサービス「[JAIRO Cloud](#)」は大学等の教育研究成果を発信する機関リポジトリの構築を推進し、オープンアクセスの進展を図るため、独自の構築・運用が難しい機関に対し、NII開発のソフトウェア「WEKO」をベースに構築した機関リポジトリのシステム環境を提供するクラウドサービスです。JAIRO Cloudを利用することで、システムの心配は不要になり、コンテンツ登録に集中できます。平成27年3月31日現在、270機関で導入されています。

当初は新規に機関リポジトリ構築する機関のみを対象としていましたが、現在では[既構築機関のJAIRO Cloudへの移行相談](#)も受付けています。今号ではDspaceからJAIRO Cloudへ移行した上越教育大学の移行事例を紹介します。

JAIRO Cloudへのシステム移行体験記

寄稿: 下城陽介氏（上越教育大学附属図書館）

1. はじめに

上越教育大学リポジトリ (<https://juen.repo.nii.ac.jp/>) は平成27年6月25日に、国立情報学研究所（以下NII）が開発したJAIRO Cloudへ移行しました。ここでは、私が体験したJAIRO Cloudへの移行作業について書いていきます。

2. システム移行の経緯

上越教育大学リポジトリでは約2,500件の論文を収録しています。DSpace(ver.1.5.2)を利用して運用していましたが、2点の理由からシステム移行、またはサーバ更新を検討していました。1つ目は、利用していたサーバが利用開始から5年経とうとしていたことです。2つ目は、年間の保守料（維持費）が高かったことです。この2つの理由を共に解決できるのが、JAIRO Cloudへの移行でした。

3. 移行作業

最初は、1ヶ月程の時間をかけて、[マニュアル](#)を読み込みました。読み始めは、理解できませんでしたが、読み進めていく内に、作業行程は多くないぞ、ということに気がつきました。そこで、全ては理解しないまでも、作業を始めてみることにしました。

さて、実際の作業ですが、以下の6つの行程があります（詳細はNIIの詳細なマニュアルをご参照ください）。

1つ目は、DSpaceが動いているLinuxサーバの環境設定です。プログラミング言語Perlが動作するようにします。この作業はDSpaceの保守業者さんに任せました。サーバを壊してしまうのが怖かったからです。

2つ目は、NII提供のプログラム（output2weko）をLinuxサーバへインストールする作業です。この作業もDSpaceの保守業者さんに託しました。サーバの環境設定とこの作業は、数日で行ってくれました。

3つ目は、プログラムの実行です。ここからは、大学内の情報システム担当を頼りました。担当の方は、Linuxを扱えるということで、色々と教えて

もらいました。そして、担当の方に見守ってもらいつつ、私がLinuxサーバにおそるおそるコマンドを打ち込み、プログラムを実行しました。この結果、メタデータ（論題・著者等）とPDFファイル（本文）が抽出されます。

4つ目は、抽出されたデータをLinuxサーバから、WindowsのPCに転送する作業です。これは担当の方がサッサと実行してくれました。プログラムの実行とこの作業は3時間程で終わりました。

5つ目は、メタデータのマッピングをする作業です。これは、DSpaceのメタデータ項目とJAIRO Cloudのメタデータ項目を結びつけるという作業です。テストデータを使って、どの項目とどの項目とが結びつくのかを、確認していききました。この作業はNII提供のSword Client for WEKOというソフトを使い、実際のリポジトリ（本番環境）に登録しながら行いました。時間はかかりますが、図書館員が得意な作業だと思います。この作業は2日間ほどかかりました。

6つ目は、本番用データを一括登録する作業です。ここで、最大の難事が待ち受けていました。1つのメタデータにPDFファイルが複数あると、エラーになってしまうのです。後々、NII担当者よりプログラムのエラーだったことが知らされましたが、このときは原因不明で、投げ出したくなりました。しかし、色々トライ・アンド・エラーを繰り返した後、最終的に、単数のPDFファイルでデータ登録して、そのデータに、残りのPDFを修正登録することで対処しました。この作業も2日間ほどかかりました。

4. 感想

そんなこんなで、我々が上越教育大学リポジトリは生まれ変わりました。人に頼ることで、何とかなったなあというのが感想です。DSpaceからの移行作業はLinuxを扱えることが必要です。私はLinuxに全く触ったことが無かったので不安でしたが、相談できる方がいたので、何とかできました。

そこで、最後に助言をひとつ。コンピュータに詳しい方を見つけて、協力してもらいましょう。学内外の顔見知り、協力者はいるはずです。

エルゼビア社の新方針をめぐる議論

Clear and present open access 13. Discussions about Elsevier's new policy

栗山 正光（首都大学東京学術情報基盤センター教授・DRFアドバイザー）

【researchmap】 <http://researchmap.jp/read0195462>

4月末に発表された、オープンアクセス(OA)に関するエルゼビア社の[新しい方針](#)は、またもやという感もあるが、激しい反発を引き起こし、[SPARC](#)と[COAR](#)が連名でエルゼビア社に修正を求める[声明](#)を出して、署名を呼びかける騒ぎとなった。署名機関は当初の23から224にまで増えており（6月20日現在）、わが[DRF](#)や[機関リポジトリ推進委員会](#)も参加している。

新方針の内容についてはDRFメーリングリスト上でかなり詳しい[説明](#)がなされており、日本語で概要を知ることができる。また、英語になるが、従来の方針との違いを端的に示した[対照表](#)も公開されている。大きな変化は、OA義務化の有無による区別をなくしたことである。これまでは、義務化されていない機関の研究者は雑誌受理原稿をただちにリポジトリで公開できたが、義務化されている機関ではエンバーゴが課されていた。これをやめて、一律、雑誌ごとに[エンバーゴ期間](#)を定めることとなった。

OA義務化の有無による区別はかねてから不合理などと批判されており、エルゼビア社としてはルールを明快にしたつもりだったのだろうが、すべての研究者にエンバーゴを課す方向で統一したため、OA推進論者には後退と映った。雑誌の中には4年という長期のエンバーゴを設定しているものもある。さらに、CC-BY-NC-ND（表示、非営利、改変禁止）が条件とされ、二次利用が制限されることも明白になった。デューク大学のケヴィン・スミスはこうした点を[ブログ](#)で痛烈に批判した。上記COARの声明も基本的に同じ考え方である。

もちろんエルゼビア社に言わせれば、エンバーゴがないと雑誌が売れなくなり、ビジネスモデル

が崩壊するということになるのだが、COARの声明では、論文原稿の即時公開が予約購読に悪影響を与えるという確たる証拠はないと主張している（この点については、図書館が「われわれは決して購読を中止しない」という誓約への署名活動をすればいいという、冗談とも本気ともつかない[投稿](#)がメーリングリストにあった）。

ややこしいことに、研究者個人のウェブサイトやブログでは、引き続き原稿の即時公開が認められている。[ArXiv](#)や[RePEc](#)に投稿されたプレプリントも査読での修正を反映できる。機関リポジトリでも、一般公開がダメなだけで、学内の利用や、請求に応じて個人的に送付することはエンバーゴ期間中でも構わない。つまり、研究者が自発的、個人的に行う情報共有は禁止していない。しかしながら、[ハーナッド](#)も指摘しているように、そもそも機関のウェブサイト中の研究者個人のホームページと機関リポジトリとを区別することにどれほどの意味があるのか、首をひねらずにはいられない。

非営利や改変禁止という制限を取り去り、CC-BYを求めるという点に関しては、従来からOA推進論者の間でも意見が分かれている。COARとSPARCは著者が希望する条件を選べるようにすることを[要求](#)しているが、これに対してハーナッドは、差し当たりCC-BY-NC-NDで十分だとして、エルゼビア社の[擁護](#)に回っている。

6月半ばを過ぎてもメーリングリスト等での議論は続いている。エルゼビア社も対話の継続は表明しており、エンバーゴ期間の決め方の[説明](#)などもなされた。他社の方針に与える影響も大きいと考えられる。今後の展開に注目したい。

次号予告 【特集】 JaLC 研究データへのDOI登録実験プロジェクト中間報告会

月刊DRFでは、皆さまからのお便りをお待ちしています。
gekandrf@gmail.com

○読者アンケートにご協力ください。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

○Facebook
<https://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>